

改訂にあたって

本書は、2014年10月に初版を出版以来、特別支援学校や特別支援学級の先生方をはじめ、多くの方々に活用され、好評のもとに刷を重ねてきた。

障害の重い子どもの学びを国語や算数などの教科の視点で検討する流れは、もはやスタンダードになりつつある。平成29年度の「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」の改訂においても強調されるようになってきている。今後も、子どもの学びを確かなものとして、教員が自信を高めて授業に臨む上では、教科の視点を踏まえることは重要なものとなることが予測される。

「Sスケール」および「学習到達度チェックリスト」は2014年に開発したものであるが、多くの現場で活用され、その実践のデータが筆者のもとに蓄積されてきた。それを元に、チェックリストの一部を改変し、現在は「学習到達度チェックリスト 2019」として提供している。さらに、いろいろな学校での実践がなされていき、活用していく上でより重要になるのは、「発達段階の意義（以下、段階意義）」の理解であることが分かった。実態把握から目標設定、具体的な授業における目標設定、これらの作業のつながりを説明する用語が、この段階意義である。この点を踏まえ、第2版を刊行することにした。

今回の改訂にあたり、主たる変更部分は以下のとおりである。

第3章の「適切な目標設定のために」に、発達段階の意義の系統図（段階意義の系統図 2019）を掲載して、実態把握から目標設定、具体的な授業における目標設定の手続きを解説した。それに伴い「スコアと根拠となる行動シート」「目標のための手がかりとなる行動シート」を改訂した。

また、第4章の2つの実践事例について、手続きを解説し、それを踏まえた授業計画に整理して、各シートを修正した。重要なことは、各シートをつなぐものが段階意義となっている点である。

さらに、「コラム2」として段階意義の理解を高めるために、新たに用語解説を加えた。

なお、本書の全体の構成は初版を踏襲し、第1章では、「Sスケール（学習到達度チェックリスト）」の開発の経緯や子どもの学び、教育課程について検討する。第2章では「学習到達度チェックリスト」の概要と特徴を取り上げ、教科と発達の視点で整理することの必要性を述べる。第3章では、学習の到達度評価と目標設定の実際について解説し、作業シートの活用とその記入の仕方を取り上げる。第4章では「学習到達度チェックリスト」の活用例を取り上げ、第5章では発達段階とその意義をよりよく理解するためのポイントを解説している。さらに第6章では今後の課題や新たなチャレンジについて述べる。

なお、このガイドを活用するにあたり、「学習到達度チェックリスト 2019」や各作業シート、および関係資料については、76ページに記載のアドレスのWebページよりダウンロードして活用できる。